

浄土

1983-3

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授受郵便誌)第三二五号
昭和五十八年二月二十五日印刷 昭和五十八年三月一日発刊
第三十九卷 三月号



しあわせの道を歩もう

「冬来りなば、春遠からじ」とは厳しい冬にたえ、やがて来るべき春に希望を托す古来よりの名家言である。庭の雑草を引きぬきながら、夏には一、二本の細い根をのばしているに過ぎなかった草木が、冬には霜や氷りに耐えるために幾重にも太い根をのばしているのを見るにつけ、これが同一の植物であろうかと驚ろかされる。自然界に限らず、人間の世界にもはげしい浮き沈みの時がある。朝に榮華をはこるものが、夕に失意の底に沈むことの何と多いことか。多くの困難をのりこえのりこえ、人は生きて行かねばならない。くらしが豊かになり、人々はレジャーを楽しむ。しかし、常につとめはげむ心を忘れてはいけない。

つとめ励むのは不死の境地である。

怠りなまけるのは死の境涯である。

つとめ励む人々は死ぬことが無い。

怠りなまける人々は、死者のごとくである。

x x x x x

「ひとをだます人間になるより、だまされる人間になれ」とかつて教えられたことがある。そう心がけていても、現実にはうまく行かない。だまされれば、はらもたつ。し返しをせねばならぬとして心になやみ、それがつもって怨みとなる。しかし怨みに限りはない。怨む者は怨まれる。ぐるぐる廻る輪のようにそれは、はてしなく、早く廻りつづけて遂にはすべてのものがなになにやら判らずに、一生のあいだ廻りつづけることになる。その輪をどこかで止めなければならぬ。それには怨みを捨てればよい。少々苦しくともがまんをしてみる。それができる人は、しあわせの道を歩くことのできる人であると思う。

怨みをいだいている人々のあいだにあって怨むこと無く、われらは大いに楽しく生きよう。怨みをもっている人々のあいだにあって怨むこと無く、われらは暮していこう。

——『法句經』・中村元訳

(佐藤 良純)

三月号



十方の世尊智慧無礙なり、常に
この尊をして我が心行を知らし
めん。

——『無量寿経』款仏頌

目次

法話

浄土宗のお戒名……………須藤隆仙……(2)

春彼岸に想う……………金子寛哉……(7)

一(口)法(話)

往生は易しと心得るが大切……………村瀬秀雄……(12)

<随想>「写経」に寄せて……………静永孝英……(14)

特別寄稿

選択の生活……………豊島徳宝……(19)

詩・・・春のお彼岸……………清川宗治……(27)

<読者のページ>

慈光遍照……………合田徹雪……(28)

仏教行軍日軍

三月の行事……………鷺見定信……(32)

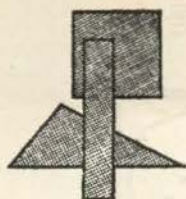
浄土句集……………田牛献選……(24)

<表紙裏・巻頭言> しあわせの道を歩もう……………佐藤良純

念仏ひじり三国志(106)——法然をめぐる人々……寺内大吉……(37)

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部



浄土宗のお戒名

須^す
藤^{どう}
隆^{りゅう}
仙^{せん}

(函館市称名寺住職)

一

最近とくに興味深く読んだ本に、『江戸文人戒名帳』
(上村英著、原書房刊)がある。その帯の文句に、「都会の
片隅にある江戸の寺々を訪ね、過去帳の戒名を通して史

実・人間ドラマを読む」とあり、著者の序文末尾に、
「戒名の成りたちと故人の事績を絡みあわせながら、江
戸から東京に残る寺々の由緒、縁起を改めて昭和期に書
き留めるのも江戸再発見に役だつのではないかと思っ
た。寺々ぶらりの文学散歩に、伴侶の興を得られれば、
私は、うれしい」とある。

著者は大正二年に東京芝白金に生まれた人で、日本美術学校応用美術科を卒業しており、『宣伝(秘)ノート』『宣伝部員・コピー心理考』『奇数と偶数の広告』といった著書のある人で、現在は情報心理学・フリーライターとある。東京の寺々を訪ね、墓碑や過去帳に広く有名な戒名を調べて、それに著者独特の考証やら感想やらを述べたもので、よく仏教各宗の戒名の特質も調べておられるし、まことにユニークな労作である。浄土宗の誉号にしても、「誉の字がつくのは、浄土宗信徒であるという印可の記号で、浄土真宗の釈と同じ意味なのだ」と説明している。

二

私がこの書の新聞広告を見て、とくに目を見張ったのは、じつは私はかねてから、史上の有名な人についてその戒名(広義には法名)を調べて、その中で浄土宗の戒名のついている人たちをリストアップしてみたならば、浄土宗という一つの宗教が、どのような人間を育てあげてきたかということの、一面を語り得る資料になるであらう

と考えていたからなのである。

幸いにして浄土宗の戒名には、誉号といって、浄土宗だけが戒名に用いる法号がある。もとは五重相伝を受けた信者だけに授けたが、今は必ずしもそうでない場合でも、浄土宗徒であれば、これがつけられる場合が多いようだ。その例は過去にあってもあったようで、五重相伝を受けたとは思われないような人にも誉号がつけられているのを見る。

また必ずしも浄土宗の戒名がついているから、平常念仏の行者であったとも限らず、死ぬまで念仏など全く称えず、死んでから誉号のある戒名を授与される人もあろうが、たとえそうであっても、その人が家の宗教として浄土宗徒であったことに間違いはなく、浄土宗の家庭というものが、どのような人間を生み出しているかということが、戒名を通じてわかるわけである。

それで私は前記のようなことをしたいと思っているのだが、それはとても大変なことで、全国の浄土宗寺院を全部歩いて、墓碑を調べ過去帳を調べねばならぬのだから、到底できる話ではない。せめて北海道だけでも調べてみたいという希望はあるが、そのような時間的

余裕はとてもない。全国の浄土宗寺院にアンケートする方法も考えられるが、各ご住職方も忙しいのだから、果してどのていど回答が頂けるか疑問である。各教区とか教化団でやるとか、宗務庁が全国的に実施するとかしてくればよいのだが、それはそれとして、まず話をとへ返えすと、この『江戸文人戒名帳』という書によって、私は江戸を中心とする文人の、誰々が浄土宗の家に育った人であるかということを知ることができた。これまでは私は私なりに、縁にふれ折にふれてこれをメモしてきたのであるが、今度は上村氏のご労作により、そのような人たちが大量に知ることができた。全く以て有難い書物である。

三

この書は四章からなり、著者なりの分類をしておられるが、今はそれと関係なく、片一端から、この書中の、浄土宗の戒名をもつ人を書きあげてみよう。(年代その他すべて順不同)

佐藤春夫——凌霄殿殿詞誉紀精春日大居士、山本隆之助(貴族院議員)——本隆院殿興誉花雲敞常大居士、上田敏——含有院敏誉柳頓居士、国定忠治——長岡院法誉花榮居士、大場の久八(東海の大親分)——信礼院義誉知仁德善居士、常滑の兵太郎(知多半島の大親分)——篤誉了実庵主、谷崎潤一郎——安楽寿院功誉文林德潤居士、元の全綱(狂歌師)——心性院琢誉阿弥陀仏宝山、知恵の内子(全綱の妻で同じ狂歌師)——芳春院園誉妙栄大姉、滝沢馬琴——著作堂隠誉義笠居士、お百(馬琴の妻)——黙誉静舟到岸大姉、みち(馬琴の長男の嫁)——操誉順節路霜大姉、山東京伝——弁誉智海京伝信士、式亭三馬——観誉喜楽泰天信士、柳亭種彦(侍作家)——芳寛院勇誉心禅居士、川端康成——大通院秀誉文華康成居士、庄司甚右衛門(吉原遊廓営業)——願誉浄心居士、唐衣橘州——心眼院開誉得聞信士、葛飾北斎——南窓院奇誉北斎居士、勝川春章(浮世絵師)——勝誉春章居士、恋川春町(浮世絵師)——寂静院廓誉湛水居士、可留女(大石良雄の妾)——清誉貞林法尼、吉三(八百屋お七の恋人)——生蓮社方誉念阿西運大徳、春

琴（お琴）——光譽春琴惠照禪定尼、佐助——真譽琴
台正道信士、石村近江（三味線製作者）——行譽淨本
信士、水心子正秀（刀匠）——無量院譽普天秀居士、
水心子正次（同）——貫修院博譽鍊秀居士、万治高尾
（吉原遊女）——転譽妙身信女、徳川家康——一品大
相國安国院殿徳蓮社崇譽道利大居士、桂昌院（綱吉
生母）——桂昌院殿從一位仁譽興国惠光大姉、お伝
の方（綱吉側室）——瑞春院殿到譽清月涼池大禪定
尼、於大の方（家康生母）——伝通院殿光岳容譽智香
大禪定尼、於愛の方（秀忠の生母）——宝台院殿一品
大夫人松譽貞樹大姉、福地桜痴——温良院徳譽芳名
桜痴居士、高村光太郎——光珠院顯譽智照居士、田
山花袋——高樹院晴譽殘雪花袋居士、斎藤茂吉——
赤光院仁譽遊阿曉寂清居士、宇野浩二——文徳院金
譽貫道浩章居士、松平春嶽（福井藩主）——淨徳院殿
永譽春嶽大居士、内藤頼直（高遠藩主）——頼迎院殿
尊譽華雲美榮直生大居士、荻生徂徠——清淨院殿根
智知專居士、松崎懺堂——積仁院濟譽履信懺堂居
士、二宮尊徳——誠明院功譽報徳中正居士、千葉周
作——高明院勇譽知底教寅居士、沖田総司——賢光

院仁譽明道居士、大岡忠相（越前守）——松運院殿興
譽仁山崇義大居士、杉田玄白——九幸院仁譽義真玄
白居士、高橋至時（伊能忠敬の恩師）——高朗院殿時
譽会終有椒居士、幡隨院長兵衛——善譽道敬勇士、
長兵衛妻——善譽寿散信女、谷文晁（画聖）——本立
院殿法眼生譽一如文晁居士。

以上は譽号があつて浄土宗の戒名と思われるものだが
（ただし自作が二、三ある）、他にも譽号はないが、どうも
浄土宗の戒名らしいのがあつた。浄土宗の寺に墓もある
のだからそうだと思うが、これは割愛した。本居宣長の
如きも、高岳院石上道敬居士という戒名だが、この人は
晩年、朝・昼・夜と毎日かかさず浄土三部經を読んだ人
で、五重相伝も受けており、別な譽号の戒名があるはず
だ。これらの人たちの中には、人物上如何かと思われる
人もあるが、しかし、女郎屋のおやじでも、博奕うちで
も、いかなる罪惡人をも救うというのが浄土宗の教えな
のだから、死んで極楽に救われたと見れば、これもまた
一蓮托生の妙界といふべきであらう。

四

こうしてみると、ずい分いろいろな人が浄土宗を家の宗教としているわけだが、じつは私が務める称名寺という寺も、この地域の功労者の墓を一ばん多く擁している。今、司馬遼太郎の『菜の花の沖』で有名になっている高田屋嘉兵衛の墓も称名寺にある。もっとも嘉兵衛は淡路の人で、家は真言宗らしいが、箱館に来てからは浄土宗称名寺を菩提所とした。嘉兵衛は郷里へ隠居して死んで、真言宗の戒名だったが、高田屋店の二代を継いだ弟金兵衛の後系は、純然たる浄土宗称名寺の檀家となり、今、嘉兵衛より七代目の高田嘉七氏は東京におられるが、称名寺東京在住総代をつとめられ、よく墓参もされている。嘉兵衛には後に戒名が追贈されて、高誉院殿至徳功阿唐貫大居士となった。誉の字がふつうの浄土宗の戒名と別なところについているのは、初め真言宗の戒名だったからである。

ご住職でも、檀信徒の方でも、改めて自分のお寺に葬られた先人の銘々を調べてみられたら、きっと面白い結果が出るものと思考するのである。

村瀬 秀雄 著

||好評新刷||

『全 訳 法然上人勅修御伝』

B 6判 八四七頁 価六八〇〇円

||好評||

『和 訳 浄土三部経』

B 6判 四七四頁 価二五〇〇円

『和 訳 法然上人選 択集』

B 6判 三八七頁 価二五〇〇円

『和 訳 善導大師観経四帖疏』

B 6判 五八四頁 価三五〇〇円

『和 訳 善導大師六時礼讃』

B 6判 二六五頁 価二四〇〇円

取扱い 法然上人鑽仰会

春彼岸に想う



金子寛哉

(大正大学講師)

(一) 暑さ寒さも彼岸まで

言い古された言葉ですが、彼岸の頃になると良く使われるのが「暑さ寒さも彼岸まで」と言う言葉です。子供の頃から聞き慣れたこの言葉ですが、高校の頃までの私

にはこの言葉の持つ本当の意味は良く解らなかつたように思います。頭の中では書物などで解説されているように一応理解もし、解つてもいたつもりですが、今一つ、身体で感る取る程まで良くは理解出来ていなかったように思ふのです。

この言葉の持つ味わい、或いは季節感と言うのが本当

に肌で感ずる程に理解出来たのは、のちに大学へ進学の為上京し、その後更に京都の知恩院で二年程過ごした、その頃になってからだったのではないかと思うのです。

勿論、高校生位ではまだ一つの言葉の持つ味わいをそんなに深く感じ取るようなことをしない為であったとも言えるが、私の場合はそのせいばかりでもないように思っています。それは私の生れ故郷が雪国の青森であった為ではないかと思えます。幼い頃の記憶をたどると、北国の春は遅く、彼岸の頃には多少春めいて来ますが、まだ雪の中です。お団子を持ってお寺やお地藏様へお参りするのまだ白い雪の中で、雪解けの歩きにくい道だったように記憶しています。このような中で過ごしたせいか、寒さも彼岸の頃で終るという実感は素直に湧かなかった訳です。北国の春彼岸ではまだまだ寒いのです。

秋の彼岸もまた逆に「暑さの終りを告げる時」と言う印象とは程遠いものでした。八月の終り頃には日中の気温はまだ多少高いにしても、夜になると、もう暑さに悩まされるようなことはなくなり、むしろ寒さを感じるようになって来ます。このようなことで「暑さ寒さも彼岸まで」と言う言葉が実感として理解出来なかったのだと

思う訳です。

所が、大学へ進学し、東京へ出て何年か過ごす中に東京での季節の移り変わりが、この言葉とともに良く付合することに気がきました。東京の春彼岸はその年によって多少の差はあっても、それを節目に暖かさに向うのが肌で感じられ、また秋の彼岸の暑気から涼気への変化も大差なく移って行くように思います。しかし、逆に京都でのこの推移は、東京程びつたりは付合しないように思ふのです。春はとも角、秋の京都の残暑は、彼岸の頃になってもまだまだ涼しさを感じさせないのです。

このようなことを色々考えて見ると、どうもこの「暑さ寒さも彼岸まで」と言う語は、誰が最初に言い出したのかは解りませんが、私の実感としては、関東の、しかも東京周辺の人が言い出した言葉だったのではないかと思われてなりません。

このような素朴な実感と共に北国の彼岸に因んで思ひ出されることが今一つあります。それ春は彼岸の雪解けと共に、今までじっとしていた地面も人間も、皆なモクモクと動き出し、又学校の生徒にとってはそれぞれの道へ飛び発つ別れの時期の到来でもあると言うことです。

何とも言いようのない不思議な雰囲気をかもし出す季節でもあったことです。高校を終え、師匠に連れられて大入学入試の為に田舎の寺の春彼岸の行事もそこそこ上京した時のことが、今でも鮮かに思い出されます。

(二) 彼岸は極楽

彼岸の行事は日本仏教の年中行事として生活の中に融け込み、宗派を問わず広く行なわれています。迷いの此の岸、即ち我々の現実の社会生活、精神生活に対して、迷いや苦しみのない理想の境涯、即ちみ仏の世界を彼岸、つまり彼岸とするのだと言うことは今更言う迄もない程周知のことです。その彼岸に到る手だてとして布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六波羅蜜の行を実践し、その境涯に到達すべきであると言う考えを中心に、各宗々々にこの行事の意義付けをしています。

それらの種々の説明は各々意義があり、何れも大切なことですが、日本における彼岸行事の故事来歴のみならず、経説等を素直に見る場合、種々ある各宗共通の年中行事の中でこのお彼岸の行事程浄土教的な年中行事は他

にないのではないかと思います。それ程良く浄土の教えと一致するのです。日本における彼岸行事の故事として広く知られているのは、お彼岸の中日に大阪四天王寺で日没を拝む行事ではないかと思えます。これのもとをたどると中国浄土教の大成者善導大師の『観経疏』に明らかに示されています。この書は浄土三部経の中の一つ、『観無量寿経』に対して、善導大師が自らの体験と信念を以て注釈されたものです。『観無量寿経』には十六種類の観法が説かれています。その第一番目に太陽が西に没する姿を観想する「日想観」があります。その経文には、

仏韋提希に告げたまわく、汝及び衆生当に心を専らにして念を一処に繫つて西方を想うべし。云何んが想を作さん、凡そ想を作すとは一切衆生、生盲に非ざるより目有るの徒、皆日の没するを見よ、当に想念を起して正坐して西に向い、諦あきらかに日を観ずべし。心をして堅住し、想を専らにして移さざらしめて、日の没せんと欲して状態みたち鼓の如くなるを見よ、

即ち日を見^み已りなば目を閉ぢ目を開かんに皆明了^{めいりやう}なら令めよ、是を日想と爲し、名けて初観と曰う。

とあります。この經文を見ただけでは、太陽を觀想する趣旨は解りますが、春秋兩彼岸の中日の行事と即座には結びつかない訳です。しかし生れつきの盲目者でない限り、生ある人間ならば誰一人として知らぬもののない太陽に対して心を喚起させ、人間の生命の根源である太陽の姿、形に注目させている点だけは理解出来ます。この文に対する善導大師の注釈の要点を示すと次のようになります。

一には衆生をして境を識て心を住せしめんと欲す。方を指すことと在ること有り、冬夏の兩時を取らず、唯だ春秋二際を取る。其の日正東より出でて直に西に没す、弥陀仏国は日の没する処に当て直ちに西のかた十萬億刹を超過す、即ち是なり。

と釈しています。この文を見ると、善導大師は明らかにこの「日想觀」を行なう時を春秋兩彼岸の中日であるとしていることが理解され、またそこには太陽の沈む方角をとって阿弥陀仏の極樂浄土の最も正しい位置であるとしていることが解ります。つまり、彼岸即極樂とする善導大師の考えが明らかに示されている訳です。彼岸即極樂と言う考え方はこの『觀經疏』の他の部分に「二河白道」の譬喩を説く所にも見られます。その意味は今更言う迄もないことですが、弥陀の浄土を彼岸とし、この娑婆世界を此岸として、その間にある火の河（瞿）水の河（貪）を渡る細くて真白な道がある、それを無事に渡り終える手だては阿弥陀仏の本願に誓われた称名念仏しかないとするのです。火の河水の河と言うのは言う迄もなく人間の持つ根本煩惱を意味し、一般仏教で言う迷いの境涯に相当する訳です。しかし、ただ単に迷いの境涯と言うのみではなかなか的確に理解し得ない多数の一般民衆に、解り良く図式化して説いたのがこの譬喩であつた訳です。

勿論、到彼岸即ちパーラミターと言う經典の用語例か

から見れば、確かに六波羅蜜等の菩薩行を実践することによって悟りの境涯に到達すると言うことが源意的には多いと思います。しかし、そのような菩薩行の実践出来ない人々の方がいかに多いか、それらの人々は一体どうすれば良いのかと言う、仏教の実践行に対する根本的な反省にもとづいて、誰にでも出来る到彼岸の行は何かと言う所から、再構成されたのが、本願を軸とした曇鸞・道綽・善導の称名念仏行による浄土往生の教えだった訳です。このように、經典に説かれる種々の彼岸に到る行も、その生いたちを見ると種々の経緯を経て説かれていくことが解り、かつまた今日の年中行事との関わりも改めて思い返される訳です。

一昨年機会を得て中国の石壁山玄中寺へ参拝することが出来ました。出かける前から、ここがどのような地形で、どのような環境なのか、しかもここで、曇鸞・道綽・善導等の祖師達がどのようにしてこの「日想観」を行なったのだろうか、と言うことを確認するのが旅行の大きな目的の一つでありました。結果は残念ながら、か

け足の旅行では望むべくもなかった訳でした。ただあの山のあたりにと指さされた方を合掌するのみでありました。

それはとも角、要は「暑さ寒さも彼岸まで」と言う言葉を感じるように、彼岸の行事を通じて、彼岸と此岸の意味を明確に理解し、彼岸の境涯を少しでも肌で感じて行くことが必要なのではないでしょうか。

『浄土』臨時増刊号

——前進座『法然』上演記念号——

A5判 五二頁

一部定価 二〇〇円 千料五〇円

(百部以上 一八〇円 千料無料)
(三百部以上 一六〇円 千料無料)

◎はるかに法然上人のお人なりを、前進座が中村梅之助丈の熱演で舞台化した、その内容を、臨時増刊号としてまとめあげました。田島栄台本を一挙に掲載し、諸先生の解説や随想を織り込んだ必読の好書。



(一) (口) (法) (話)

往生は易しと心得るが大切

むら せ ひで お
村 瀬 秀 雄

武蔵の国（東京都）の御家人津戸の三郎為守は東大寺供養のために鎌倉を發った頼朝に供奉して京都に上り、建久六年（一二九五）二月二十一日に法然上人の庵室を訪ね、偏えに念仏を唱える行者になった。そして故郷に残ってからも専ら念仏を唱えていると、近郷の三十余人が為守をまねて念仏を唱える同信者となった。しかしある人がいつていた。

「熊谷の入道にしろ、津戸の三郎にしろ何も知らない者であるから、法然上人は普通の仏道修行はとてできないことを知って念仏の行を勧めたのであらう。もし学問があつたならば必ずしも念仏に限らず、その他の修行も教えたに違いない」

このような噂があつても無理とはいへなかつたのである。当時の常識としては、仏教は理解し難い深遠な哲理を説き、困難な修行を長らく積まなくてはならないと考えられていたのである。越後の国（新潟県）で布教していた一念義の人は、法然上人には独自にたてた奥義があつて、それは深遠な法門であると宣伝していた。そしてお弟子の中でも勝れた才能を持っている自分たち五人だけが、その深法を会得できたのであると自称していた。恐

らくこの地方の人には、その通りであろうと納得したに相違ない。ところが法然上人は学問のある者もない者も、罪がある者もない者も、善人でも悪人でも、持戒の人も破戒の人も、賢人も愚人も、すべて同じように念仏を唱えれば必ず極楽往生ができると教えたのである。念仏の教えが余りにも易しく、誰でもできる行であったために返って人々はとまどいを起し、半信半疑の心から素直に信じきれないものがあつたであらう。

遠江の国（静岡県）の蓮華寺にいた禅勝房は天台の教学によつてでは迷いの世界から抜けることが難しいと考え、熊谷入道の蓮生房から浄土の法門のあらましを教えてもらい、更に推挙の紹介状をもらつて法然上人を訪ねた。やがてお弟子の中でも信心堅固であると評判されるまでになった。その後帰国するために暇をつげる挨拶をした時に、法然上人は京土産であるとして、次のようにいった。

「聖道門の修行は知恵をきわめて生死の迷いから離れ、浄土門の修行は己れの愚かさに立ちかえつて念仏を唱え、極楽浄土に往生するのであると心得るのがよい」

故郷に帰つた禅勝房は自分の信仰について誰にも話さ

ず、身につけた工匠の技能で生計の糧を得ていたので、人々は大工の禅勝と呼んでいた。そこへ多念義の隆寛律師が配所に赴く途中で見付の国府に逗留し、手紙で禅勝房を呼んで会い、涙を流しながら昔の懐しい話を語り合つた。やがて二人は別れたが、隆寛はいかにも名残り惜しげに見送つていた。隆寛の弟子たちは遠くまで見送り、何か一言承りたいというところ、禅勝房はしばらく考えてから向き直つていった。

「各々方には念仏を唱えるのに、口癖のようにして常に唱えてもらいたい。そして極楽往生をとげて下さい」

その禅勝房は、かつてこのようにいつていた。

「浄土宗の教えを学ぶには、極楽浄土に往生するのはたやすい事であると心得るまでが大切なのである。たやすいと心得れば、たしかにたやすい事なのである。近頃の学僧の議論がいろいろに分れていて、私の教えは深遠であるために議論の邪正を弁えることは難しい。ただし先師上人が仰せられていたことの中には、決して難しい議論を口にすることがなかった」

念仏は易しい行であつて、しかも無上の功德があることを自ら体得することが肝要なのである。

「写経」に寄せて

静 しず
永 なが
孝 こう
英 えい

(東京・小日向深光寺住職)

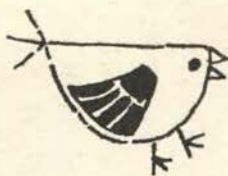
昨年の秋の彼岸すぎのことである。

安芸の厳島神社を訪ねた。

「平家納経」を拝観したさに、である。

今まで何回となしに、厳島を横眼で見ながら、そのわきを通りぬけていながら、一度もたち寄る機会がなかったが、幸いにこんどは、厳島を中心にして旅をすることになった。

厳島神社は一般に知られているように、平安朝時代の「平家」の守護社である。今日でも、神社は、その住民、氏子のみならず、広く一般に、尊崇されている。



徳川時代から、日本三景の一場所と言われているだけあって、景色は実にきれいだであるが、私は景色を見に行つたのではなくて、神社に納められてある「平家納経」を拝観したさに、である。そして、それに添えたしにではあるが、神社の渡り廊下の台石に、「赤間石」を用いてあるが、それを見たさに、である。赤間石は、日本最高の「硯」石だと言ふことである。そして、今はその石は、ほとんど全部掘りつくして、無くなつてしまつた、とのことである。

国宝「平家納経」の現物は、拝観することは出来ない。大正時代の末年、本物そのままそっくりに模写されて、それが現在、宝物博物館に展示されている。今はそれに依るしかいたしかたがない。

それは見事な莊嚴^{しょうごん}経である。

妙法蓮華経三十卷、阿弥陀経一卷、般若心経一卷、それから願文一卷、計三十三卷よりなり、平清盛がその全盛時に、平家の無事安穩を祈念して、一門三十二軒の当主に命じて一本づつ書写させて、一個の箱に納めて奉納させた。

莊嚴経であるので、その莊嚴の内容は、実に見事に出事上っている。

清盛が、その当代の粹を集めて造つたものであるから、平安時代の代表的美術品と言っても差し支へはないと思ふ。

紺紙に銀泥で線を引き、金泥で本文を書いたものあり、黄色経紙に墨で書写したものもある。本当に見事なもののばかりである。

あまり見事であるから、時の経つのを忘れて拝観していたが、伴れのものにうながされて、息をのんでそこを引きあげた。

x

x

x

x

それからしばらくして、十一月の二十六日に、奈良の正倉院展を観に行った。
そこで、「天平の古写経」を拝観して来た。

天平の古写経は全部、黄色和紙に書かれている。平安時代の華麗さはないが、厳肅な信仰経である。

外観は一卷の「お経」であっても、「仏陀」のたましいのこもったものとして扱われていた。一卷のお経のみならず、書かれている一字一字に、たましいが宿るものとして取り扱われ、そう考えられていた。お経の一字一字が「仏」であり、したがって一卷のお経も「仏」である。

天平時代の人の、お経に寄せる気持が、文字に現われている。

「仏陀」に寄せる信仰の深さが、天平経からは、読みとれる。純粹であり真剣であった。

天平経の一字一字には、その時代の赤い生血が流れていて、生き生きしている。一字一画、生きている。

そして「青竹」を割ったような、するどさがうかがえる。手を触れれば、切れて赤い血が出るような感じがする。

官営写経所の写経生の書写経であるが、天平奈良時代は、時代の特色、即ち時代の流れとして、「純粹仏教信仰」に生きていた時代である。

x

x

x

x

天平文化は、中国の隋、唐時代の文化を受け入れて、それを日本で消化し開華させた文化である。先年、中国の西安（昔の長安市）を訪ね、博物館で、隋、唐時代の古写経を拝観した。善導大師の御存命時代の書写経であ

る。日本の古写経のお手本である。

弘法大師も、ご承知のように中国で勉強された。帰国してから日本で書写されたと伝えている「隅寺心経」と言ひ書写経がある。私はそれを手本にしている。実に立派である。

さて、中国の六朝や隋、唐以後の「古書写経」を拝していると、ある種の共通の感慨を抱く。

「書写経体」とも言うべき、特徴的形態のあるのに気付くのである。どんな特徴かと言うと、文字の横画は細く、縦画は太く、しかも両方共、するどく、力強く書かれている。そして、一行は十七字になって来たと云うことである。

各地の仏寺や、信徒が奉持しなければならないから、急いで沢山書写しなければならない。字の画をすくなくしたり、又略字にしたりして書いた。しかしながら、信仰を持って書写しているから、一画、一線が力強くするどく書かれている。

唐時代、玄奘三蔵などが印度からサンスクリット語で書かれた仏典を沢山持って帰国された。それが中国語に翻訳され、即ち漢訳され、そして、それを書写して各地の仏寺や、信徒に流布された。非常に盛んに行なわれた為に、洛陽の紙価を高からしめたほど盛んになったようである。

経典の書写が、盛んになればなるほど、文字に影響を及ぼし、「写経書体」がととのって来たようである。

その「書体」が、現在、一般に用いられている活版の印刷活字の原形のルートであると思う。

x

x

x

x

誰しも気付くことであるが、経典の中には同じ句が沢山出てくる。仏名だとか人名だとか地名などである。本

当に沢山、出てくる。

經典を書写する場合、何回も何回も同じ「字」が出てくると、そこで「略字」が自然に発生してくる。これも止むを得ない現象である。

伝弘法大師作「隅寺心経」を見ても、すぐ気付く。文中に「無」の字が何回も出てくる。それで「無」の略字として「无」の字を用いるようになったのではないかと、思われる。「无」の字は、平仮名文字の「ん」の原の字であり、片仮名の「ン」字の原である。

平安時代、仏教と共に古代印度語、即ち、サンスクリット語が、我が国に入ってきた。

今日までも尚、それが伝わり、用いられている。所謂、仏陀の「真言」すなわち、「陀羅尼」がそれである。その当時、ダラニの学僧が、その時の日本語を、発音別に組み立てたのが、「アイウエオ五十音表」である。

その五十音に、もっとも適当する発音の漢字を、あてはめて、出来あがったのが五十音の字表である。

そして、在来の日本語にあてはめた漢字を、省略して、片仮名文字が出来たのだと思う。

片仮名文字の発達は、写経の影響を強くうけたと思う。写経の際には、省略文字を沢山用いてある。

毎日写経をしているうちに、日本語の音標文字の、五十音表の発生ルートが、おぼろげながら浮かんでくる。

さて、このアイウエオ五十音だとか、いろは四十八文字の音標文字であるが、考えて見ると、現代日本文化に大変な影響を及していると思う。

われわれ現代人は、外国語を、音標文字で受けとり、その言葉の内容実体を、そのままそっくりうけ入れていく。

たとえば、ラジオだとかテレビ又はコンピュータ、グラスファイバー、リモコン等々。

われわれの日常生活に必要不可欠の外来文化を見ても、このことはよく判ると思う。

将来ともこの音標文字は、日本の文化内容を一層ゆたかにして行くであらう。

特 別 寄 稿

選 択 の 生 活



選択とは取捨の意。「不要なものを捨て正しいものを選び取る」と辞書にある。選択の生活をなし、凡夫が報土に往生出来る唯一の道、選択本願の口称念仏を一切経に被見し、遂に観經疏かんぎんしよの中から発見し、浄土宗を立てられた浄土宗宗祖法然上人は、文字通り選択の生活を一生を通して行った御方である。

第一の選択は、上人十八歳の時、久安六年九月の頃である。天台座主の言に従い、天台の修行に励み、天台座主への道、大僧正、緋

衣被着えひやくの榮譽の道を選ぶか、又は今は亡き父の遺言に従い、隱遁いんとんの道に入り、父の菩提、母の菩提、更には仇の明石の武者源内定明の菩提を弔い、己が上求菩提、下化衆生の道を選ぶか、十八歳の上人の心は苦悩の連続であった。上人は僧侶の榮達の道を捨て、一生黒衣で通す平僧、修行僧の道を選んだ。人間誰でも五欲ごよく（食欲、睡眠欲、性欲、金錢欲、名譽欲）を持つている。老年になっても名譽欲は失われるどこか益々強くなる。私は我身に比べて

豊島徳宝
（八王子市相即寺住職）

上人の偉大さに只合掌するばかりである。

具体的には、叡山西塔黒谷の慈眼房叡空の室に入り、叡空から法然房源空と名づけられた。第二の選択は申すまでもなく、承安五年春、上人四十三歳の時である。初めに申した如く、西塔黒谷の報恩蔵の中で一切経を被見し、遂に善導大師の観経疏により立教開宗したのである。即ち聖道門を捨てて浄土門に入り難行道を捨てて易行道に入った。

浄土宗の立教開宗により特筆すべきは、女性の往生浄土の道が開けたことであり、凡夫が真実報土である阿弥陀仏が莊嚴された西方浄土に罪の有る此の身此のまま、御本願に乗じて念仏して往生させて頂けるのである。

単信口称の選択本願の念仏を申せば、それだけで在俗のままに往生浄土出来るとは何と有難いことであろうか。有難さのあまり、「南無阿弥陀仏」の声が自然に口について出て来るのを禁じ得ない。

これが浄土宗の選択本願の念仏なのだ。

「有難さ」が口について出るのが御念仏なのだと思つづく考えながら日々御念仏させて頂いている昨今である。私は名前を徳宝と言う。無量寿経の中の「広施功德宝」から八王子大善寺の山本大善上人が私につけた名である。名を体を現すと言う。私は大いに困っている。広く功德の宝を大衆に施さなくては、私の此の世に生を受けた甲斐がない。今更どうにもならない。

私には自房がある。又御本山で説教が出来る。私は前世からの因縁と檀家相手に布教に努めている。私は宗祖法然上人の教えを広める任務を負って生活させて頂いている。

選択の生活をどう生かすか。私は若い時に、南画と、書と、囲碁を併修した。囲碁は「親の死に目に会えない」と言うので止めた。止めた為に母の臨終には、母の最後の念仏に助声して臨終の念仏を行うことが出来た。書と南画は両立しないので、書だけにしている。現在は書も教えることは止めて、専

ら仏教書、宗門書を研究している。

私も、今年は満六十五歳になる。宗祖法然上人が三昧発得した六十六歳は来年に迎えられる。三昧発得とは、生きている中に、口称念仏三昧中に、自然に阿弥陀仏の極樂の御姿、声、阿弥陀仏の順に極樂の莊嚴を拝見することが出来る崇高な宗教的体験である。私の様な愚鈍な者は此の世に生ある限り、煩惱眼を遮ぎって三昧発得は不可能である。而し名体不離の教えにより、三縁中の近縁の有難い御縁によって、口称念仏すれば阿弥陀仏は行者の面前に直ちに御立ち下さるのである。「目に見えず、耳に聞えず、手にふれず、心にふれる、弥陀の御光」の御歌の通りである。

私は生来蒲柳の質である。此の十年來風邪をひくと、全快するには半月はかかる。そこで人に会うと「一病息災」を説く。人々は「無病息災」は知っているが「一病息災」もあるのかと言う。私は何か一つ病氣を持っていると無理をしないから自然に長命になる

と、理由を話して了解を得ている。「柳に雪折れ無し」である。近來朝早くジョギングをしている老人に会うが、寒い間は無理をしない様にと望むのである。「老人の冷水」は、真理である。

私は二十歳代に有名な大石順教尼の話を聞く機会を得た。大石順教尼は、「花の吉原十人斬」の犠牲者の一人で、両手を狂刃に斬り落されて、付き添いの小女が身の周りの世話をしていた。「私は仏門に入ってから、生命の尊さを知った。生命有らん限り生きて生かぬのが、尊い生命を阿弥陀仏から頂いた此の御恩に対する御恩返しである」の御言葉が耳を離れない。講演の後で、付き添いの女に硯と筆と紙を出させ、筆を口にくわえて書いた字が又素晴らしいことを覚えていた。「両手は無くとも生命有らん限り、仏から与えられた此の尊い生命を、寿命有る限り生きぬくことが南無阿弥陀仏と知った」と言う大石順教尼の有難い御言葉。現今の自殺、他

殺、心中の多い世相をテレビ、新聞で見ること、阿弥陀仏から与えられた此の生命尊い二度とない人間界に生を受けた有難さ。限られた年齢。生きて元気になりたいと願望しながら、病いの為に散り行く人々の何と多いことか。その中で何で自らの生命を絶つのか。私には自殺者の心理が分らない。生命の尊さをあらゆる機会に教えなければならぬと、改めて思う。

法然上人は御法語の中に、「或る時には人身のうけがたき、ことわりを思ひて、このたび空しく、やまん事を悲しめ。六道をめぐるに、人身をうる事は、梵天より糸を下して、大海の底なる針の穴をとほさんが如しと云へり」と仰せられて、人の身を受くることの難く、六道を巡っている間に、人間道に生を受けることは、梵天と言う天の上から糸を下して大海の底の針の穴に糸を通す様に困難で有難いことなのだ、人間界に生を得たことを喜び、一生を只ぼんやりと送り、又六道を巡

る輪廻の生活を、念仏を申すことにより絶ち切る様にと教えられている。

人々は人の身を受けたことに何の感動も示さず、有難いことなのだと言う自覚も持たず、五欲にふり廻され、三煩惱の命ずるままに罪に罪を造って何の反省の考もない。人間界は、再び六道輪廻の生活をくり返す業を重ねるか、又は選択本願の口称念仏を称えて、六道輪廻を絶ち切り、往生浄土の道に進むかの分岐点である。此の大切な分岐点であることを考えて酔生夢死し、六道輪廻をくり返してはならぬと思う。

私は終戦直後、花山信勝師の巢鴨拘置所内での戦犯処刑の御話を御聞きしたことがあつた。その戦犯の中に一人の青年将校が居た。憲兵であった為に死刑を言い渡され、始めは「どうして殺されなければならないのか」と、花山師の言葉も耳に入らず悩んでいた。花山師は氣落ちしている青年の為に、「貴殿の死は犬死ではない。新しい日本、平和日本

文化国家日本を造り出す為の尊い犠牲者として、国家の捨て石となって、日本国家の為日本国民の為に往生するのだ。死ぬのではない。永遠に栄える日本国再生の礎（いしづ）となり、十三段の階段を登るのだと静かな口調で話し、浄土宗の勤行式を与えた。彼は毎日勤行式の通り読経念仏して、遂に決定往生の心を固めることが出来た。「今日も又生きられたぞよ南無阿弥陀」の句は、往生浄土の決意が固った彼が、花山師に示した一句である。二

三日して、彼に十三階段を上る命令が下った時、彼は心静かに念仏しながら往生浄土の途についたと伝えられた。たった一つの尊い生命を、日本国永遠の平和の為に献げた青年将校の話を、私達は心に深く受け止める必要がある。

終戦後三十七年を迎え、私達は繁栄の世の中に暮している。物についても大切に用いる考え方は失われている。危険物置場、捨場には未だ充分に使用出来るテレビ、自転車、冷

蔵庫が捨てられている。大正生れの者には、今は持っていない何の役に立たないものも、愛着があつて捨てにくい。「有田憂田、有宅憂宅」で、持ちすぎても持ち物も時々整理している。

私は法然上人にあやかって「選択の生活」に心掛けている為か現在には心静かである。生命の尊さを知り、無理なき生活を送り、南無阿弥陀仏の口称念仏の中に日暮しさせて頂く生活は、光明攝取の生活であり、冥祐冥護の生活であり、随逐影護の御利益を受けさせて頂く生活である。選択の生活は「南無阿弥陀仏」を申し申し生活させて頂く生活である。此の世を暮す為には南無阿弥陀仏を申しながら日暮しせよと、法然上人は御教えになられている。南無阿弥陀仏を申し易くする生活態度をつくることが何よりも大切であるとの教えが、浄土宗の教えである。その為には選択の生活が大切である。

浄土句集

一田牛畝選

評 日本一の鐘は浄土宗総本山知恩院の鐘である。幾十人の僧が撞いているのがテレビにうつされる。その鐘を聞きつつ新しい年を迎えるのである。家にいて坐って聞くことの出来るのは有難いこと。

なんなんと膝に手合わせ初言葉
福井 深井 鉦士

増築のようやく進み寒に入る
東京 吉田ゆきえ

娘の頭三度傾け屠蘇を注ぐ
福岡 行正 明弘

評 合せた手を膝に置き念仏をなん、なん、と唱えている幼子は、親がお仏壇向って手を合せてのお念仏を見ているから自然に合掌念仏しているのである。家庭教育は大変に力あるものである。

評 新しい部屋を増築される。その工事もようやく進み寒に入った。さぞかしよいお部屋が出来ることでしょう。目出度し目出度し。

評 一回二回三回と娘さんが頭を傾けて屠蘇を注ぐ。きつと可愛らしい娘さんらしい。最後に母様から注いで貰った娘さんは満足そうである。

称名や法然さまのお身拭
山口 上野 明達

冬落暉関所日記の細き文字
東京 猪瀬 幸子

肩車せる孫の掌に破魔矢受く
東京 細田 初枝

評 法然上人のお身拭は十二月二十五日で行満行僧をはじめ沢山の参詣の念仏の中に、浄土門主の手にてお身拭が行われる。いと厳肅である。

評 箱根の関所の日記をめくれば文も細く、夕方で太陽は沈まんとしている。然し目は日記より離れようとしれない。
福岡 荒牧 還愚
テレビにて祖山の除夜の鐘をきく

評 肩車して貰っている孫は参道の人波の上に抜出ている。破魔矢を受けて高々とかかっている。如何にも得意そうである。
群馬 島津 か寿
お地蔵へ供へてまわる晦日蕎麦

東京 田中 秀代

冬の宿瀬音を子守唄と聞き

福岡 安藤平次郎

日の落ちてほのかに百日香咲けり

山形 松田 允子

片言の子と遊びいし日は短か

東京 新井 新生

せせらぎのあるいは高く夜長かな

大分 丹羽 難中

新嫁もてんてこ舞いの十夜祭

神奈川 松本せつ子

御師僧の足袋の白さよ初詣経

東京 遠田 弘俊

朝風の石狩の海漁り船

福岡 林 澄山

落柿舎に時雨来しよき雨宿り

富士真白湖上にボート日向ぼこ

東京 末常てる子

山形 松田 光替

無人駅にも供えあり鏡餅

東京 小笠原香祥

雪まぶし秀峰真近にくつきりと

箱根路の吟行楽し初句会

東京 真野よし子

福岡 服部 光代

大工来て左官も来いる秋日和

東京 栗原とも子

一杯の酒にはなやぐ初句会

除夜の鐘撞いて嬉しさ我生けり

福岡 安藤 良全

福岡 高良 幸代

初旅や夜空に浮ぶ平戸城

東京 満尾衣有子

箱根路は行かれぬままに初句会

棚経をすまして夫のやすらげらる

三重 森 静枝

東京 栗原やえ子

初富士や青年一行手を合せ

福岡 上滝津弥音

落柿舎の庭に紅萩虚子の句碑

成人日娘等装おうて伊勢大社

三重 山田 うた

福岡 原 敬二郎

菜掘る効能信じ疑はず

福岡 前田 秀峰

街道に夾竹桃の布哇かな

京踊り都踊りと花の京 一田 牛畝

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』誌の遅配が続いており、まことに申し訳ありません。

どうか今後また、『浄土』誌の充実のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、大西耕三先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20 cm×30 cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30 cm×50 cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の分、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 二102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振 替 (東 京) 八 一 八 二 八 七

詩

詩

詩

春のお彼岸

清きよ
川かわ
宗そう
治じ

彼岸桜の花びら

ひとひら、ふたひら……

ひらひら舞って、ひらひら落ちる

春風があたたかく

やさしく、頬をかすめて行く

やさしく、心をなでて行く

お父さんとお母さん

そして、私たちも一緒

春のお彼岸――

家族そろって

なかよく、あかるく

お寺まいり、お墓まいり

慈光遍照



塔高きが故に貴からず、心深きを以て有難しとなすなり。

明治時代の文豪幸田露伴氏の「五重塔」は小生の大好きな作品の一つである。が、芸術的な描写を考える前に、あのような実際の現実社会、それが悲しい。よってここに、一警鐘を打鳴らさむとするものである。

「五重塔」梗概

五重塔建立に当り、師の源太を差置きその弟子ノッリ十兵衛が直々、上人に仕事の懇願に及んだ。

合ごう田だ微び雪せつ

（山口県防府市在住）

そして、幾度もの波乱の末拜命した十兵衛に、源太が秘蔵の参考資料を示そうとすると「他人の巾着でわが口を濡らすのは嫌だ」とはねつける。

（この一言は深慮慎重を要する芸術魂に反し、我利商魂に通じるものである。が、作者は人間動物の弱点に対し、温い許容を与えている）

源太は怒り、一同僚は十兵衛の片耳を切落すが、五重塔は遂に完成。

処がその落成式の前夜、大嵐が起る。自信満々たる十兵衛も、上人の声掛りと聞かされ、塔に駆登る。

「塔が倒れてもしたら切腹させてくれよう」と源太の
眼尻は引裂けむばかり。

然し、一夜明ければ昨夜の嵐は嘘の如く治まり、釘一本揺るがぬ塔に、上人は「十兵衛造り、源太これを成す」とした。

右原作の芸術性に就ては、俗な嘴をいれる隙など見出せぬ。すでに幾度となく舞台、映画・テレビに取上げられ、繰返し観ているうちにいつの間にか小生に、幻の五重塔劇が浮かんで来た。

そして、一切の世俗的顧慮を排除して文芸的価値を盛上げられた小説に、一般大衆向け小生の悲願を少しばかり織込んでみたくなった。現代に呼吸する出演者にも観賞者にも、新しい血肉となるものを捧げるため。

一 主人公十兵衛の芸鬼振りを、さらに高踏的なものに格上げし、

一 門財閥上人（宗教家というより所謂事業家的な）の絢爛袈裟衣につつまれた姿形ばかりでなく、心の中までも聖職人らしく充実させ、

一 仕事上の利害関係のみの出入り付合いしかしていい源太に、聖僧の感化を与え、

一 トバク・争闘・ヤクザ謳歌をも戒め、等々と長しい理屈を列挙するより、次のストーリーにお目通し願ひ度い。

慈光

神仏知らず、酒・女・勝負事にも一切無縁。ただ「芸鬼一筋」の愛弟子なればこそ、数珠は爪繰っても今ならパチンコにも行こう花も実もある師源太から、シャッポを脱いで五重塔建立の重任を譲り渡され、残して行った有難い参考図すら見向きもせぬ十兵衛。

「その一徹が玉に疵」とその夜、愛妻から泣いて諭され、

「アーッ、おれの設計より師匠の方が一段上？　否やっばり……」

晩近く「こう改めれば更に——」

（芸術家に空意地は禁物。常時忘れてならぬ反省と努力）

けれど、社交性欠如の彼は同僚嫉まれ傷つき、職人一同からも見放される。

にも関わらず何人の影の力か（師源太の美しい伏線愛情）不思議と人々の心も解け、無事完成の運びとなる。が、竣

工式前夜に、思わぬ大嵐。

「塔が倒れる?」「倒れぬ?」で、賭事騒ぎうるさい俗世。

それを他所(よそ)に、

「いかに天才とて、天災には勝てぬ。作品その物の見事さに何等かわり無し。然し、浅慮な野地馬ばかりの世間体もあり、万一の事あらば即刻修理の手筈もこの通り」と、篠つく雨夜中、仕事着姿の職人一同を従え待機の師源太。

その温情に感泣してこそ「十兵衛造り、源太成す」と上人によって立てられた高札に、欣喜可能の十兵衛。

原作に見られる師弟間の反目は、すべてそれぞれチャッカリとウツカリの妻女間に移し、女子小人の遠く及ばぬ男の世界を打仰ぎ、互いに女同志手と手を執り合う。

(野暮ったい男主演劇に、花の女性色香を添える)

日頃寺門出入りも無意味ならず。源太をこれ程の人物にした、名実共に高僧と呼ぶにふさわしい上人の手により、純粹に壮重絢爛たる拳式の、心の底から湧上るフィナーレとはなる。

折から旭光遍く等しく、人々の肩に降注ぐ。

然し、男女同権、否、女性上位とさえいわれている現代。女性側から黄色い声の抗議の出よう事、火を見るより明らか。そこで――。

合掌

愛弟子なればこそ折角秘蔵の絵図面を見せようというのに、にべもなく断られ怒り帰宅した夫に代り、源太女房が血相変え十兵衛住家に現れる。

磨澄まされたノミを十兵衛に突付け、

「よくも夫に恥をかかせてくれた。私は、田舎出のお前が女房とは違い、木遣音頭で産湯にもつかった。この腕の彫物『源太いのち』は、伊達酔狂でない」

と意気まぐ。この時、素朴そのものの十兵衛妻女房がおそるおそる、

「私には巧くいえないけれど、誰にも見せぬといわれた師匠秘蔵の絵図面を、見向きもせずに突返すなど、大恩人のお顔に泥を塗るばかりか、そんな独り良がりの怠け根性で、立派な仕事が出来ましょるか。でも、私のいう事が真違っていたら許して……」

と涙を流して合す両の手。

そこで性根を入れ換えた十兵衛が、更に改めて徹肖精魂を打込む。

が、仕事の進行中、心治まらぬ同僚の一人が、十兵衛の片耳を切落すという椿事突発。

その時、いち早く駈付け献身介抱したのは、源太の妻女。(田舎者と侮った十兵衛妻から、賃夜教えられて)

落成式前夜の大嵐で、

「塔が倒れたら十兵衛に詰腹切らせる！」

と意気巻く源太に、妻は元の鉄火女に還る。

「耳そぎ落した弟子が弟子なら、師匠も師匠。斬った張ったのバクチ打ちに、お前さんはいつ職換えした？ 塔が倒れても倒れなくても、十兵衛の技量には無関係。ただ良心的な仕事に取組む熱情こそ、真の職人堅気」

かくて、女房族の深慮と愛情によって目覚めさせられた男達、いささか面映ゆい五重塔建立祝いを開始。

爾後、源太女房も十兵衛妻同様、貞淑の二字を全うする。だって十兵衛も源太も、これ迄と打って変った夫、否、立派な人物に変身してくれたものを。

遍 照

ひたすら祈願したい。最初からこの様な事件の起らぬ、平穩無事な社会出現の日を。

塔高きが故に貴からず、心深きを以て有難しとなすなり。

以上

明治の原作者が、右、「慈光」「合掌」に類似の事を書かれたら、不自然であらう。

然し現代は、これで当然とする世相であって欲しい。他宗教や宗旨を、批判攻撃したりは本物でないと信じている小生にして、敢えて身の僭越をも省みず、江湖に捧ぐ。

(芸術・宗教・科学・哲学・政治・経済その他あらゆる分野の脱臭と和合とを、ひたすら希いつつ力及ばず、徒らに慨歎するのみ)

陶淵明の詩「天地とこしえに没せず」と同様の言葉が哲人ニイチエにもあるけれど、小生の住む瀬戸内海からして日本一清らかな海より日本一汚れた海となり果て、天地いまや覆らむとしている。この時、宗教も早や覚醒期を迎えたと思うのである。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩
⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳
㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚
㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵
㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十
三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十
四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十
五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十
六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十
七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十
八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十
九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

三月の行事

——彼岸会

鷺見定信

通常、彼岸会の起源は八〇六年、春秋二期の七日間を
崇道天皇の怨霊をなぐさめるために諸国国分寺において
「金剛般若経」を転読させたという「日本後紀」の記事
にもとめられている。これ以降恒例化された彼岸会は、
鎌倉期後半より室町期を経て民間にも浸透するようにな
ったとみるのが一般的である。

江戸期にはいるとさまざまな彼岸習俗がうまれてく

る。「東都遊覧年中行事」からそうした一例をあげてみ
よう。

「行基菩薩の作、一木六体の阿弥陀を安置する寺々へ
参詣するを六あみだ参りとて人群をなす。……日本橋よ
り立出でて日本橋へ帰る。道法凡七里十三丁也、参詣す
る人の住所によりて亀戸よりうちはじむるもあり。ひが
ん中はさんけいあまたある故、道をしらざる人も参詣の

人に随いゆけば道にまどう事なし」とみえている。さらに「彼岸の中日、増上寺、浅草寺、東海寺山門開き登るをゆるす」とある。彼岸には寺院の法要をはじめ墓詣りなどの諸行為にまじって六阿弥陀まいり、三十三観音巡りなどに多くの人々が参加していることがわかる。さらに中日に限って諸大寺が山門を開放したこともみえている。山門に登った人々は西に没する日を拝むのである。彼岸の巡拝と高所にあつて夕陽を拝する、という二つの行為は仏教的色彩をとりながらもその裏に民俗慣行がほのみにみえているようである。

〈彼岸の霊場めぐり〉

六阿弥陀まいりや三十三観音めぐりのようにいくつかの霊場をまわるという信仰習俗が、彼岸（とくに中日）に行われる例は多い。そうした一つに九州の杵岐にみられる美濃の谷参りがある。新仏をだした最初の彼岸（中日）に、「ホトケマイリ」と称して、島の北東部の勝本町にある小さな丘にあるミノタニサマに詣るのである。このときには真竹のさきに椿の花をさした杖を持ち、サンヤ

袋（頭陀袋）をかけていくのが普通であった。サンヤ袋には米、賽銭、ヘソ菓子が含まれている。巡拝する人々は、施主は無論のこと、講中や血縁のものも含むことが多い。そのために、さして広くない街道は、杵岐全島から巡拝にあつまった人々で久々のにぎわいをみせることになる。

いくつかの霊場（といっても小さな祠や寺院の境内に合祀されたものも少なくない）を巡り、最後に美濃の谷の小さな堂に着くと、椿の花をさした杖を納め、そのかわりにすでに納められていた古い杖ととりかえるのである。この杖を持ち帰り、新仏の墓所に供えるのである。「美濃の谷におまいりしない」と仏様は家の中にはいれないと伝えていることからみれば、美濃の谷は死者の霊のすみかであり、中日には杖に託されて再び家にもどると考えられていた。

こうした死者の山への巡礼は四国にもみることができ。七ヶ所めぐり、十里十ヶ所詣りと呼び方はちがっても同様の習俗が報告されている（武田明）。

弥谷寺は四国霊場七十一番の札所であるが、近郷の人々にとっては葬式後三日もしくは七日に、または彼岸の

中日にお詣りをしなければならない寺である。中日のイヤダニマイリは、弥谷寺を含めた七ヶ所の霊場（寺院をめぐることから、従来より七ヶ所めぐりともよばれている）。

十里十ヶ所詣りも同様であり、切幡寺を死者の霊地として合計十ヶ所の霊場をめぐるのである。

ところで、六阿弥陀まいりや美濃の谷、七ヶ所詣、十里十ヶ所詣りのいづれもが、その巡礼経路が、二十キロから四十キロでほぼ一日の行程である。これは偶然のものではない。

巡礼とは本来、肉体的にきわめてつらい宗教的行動であるといわれる（星野英紀『巡礼』）。むしろこのつらさが重要なのである。また巡礼とは日常生活を一時離れ聖地に向かい、そこで聖なるものと近接し、ふたたびもとの日常生活にもどる、という宗教行動であるとも定義される（星野）。日常生活にしばられている人にとっては、一時的にでもそこから脱出することは、理由はどうであれ解放された気分はあったろう。巡礼の目的が先祖供養であろうと自分自身の修養のためであろうと、一日に二十キロないしは四十キロの巡拝行程はたやすいものではない。

いが、そこには適度な苦行性と日常生活を離れた解放的な行楽のよろこびをみることもできよう。しかし中日に何故巡礼が行われたかは、それほど明らかではない。むしろ先行する行事をとりいれたものとおもわれる。民俗行事として、社日や日むかえの行事との関連が考えられるのである。

〈日まつり〉

彼岸は太陽が真東から昇り真西に沈むときであり、昼と夜とが等しい時である。人々にとっては単なる自然現象としてはすまなかったであろう。とくに春分は農耕がはじまるときであることはよく承知していた。人々は太陽を神格化するのに何のためらいもなかった。

彼岸の語源は仏教の波羅蜜多（到彼岸）ではなく、農耕儀礼としての太陽信仰であり、日願ではないかと推定する人々がある（和歌森太郎・五来重）。到彼岸か日願かは別に、春分のころに日を拝む風習があったということは、民俗をたどることによって知られる。太陽が昇る午前中には東に向かって歩き、太陽が沈む午後には西に向っ

て歩くのである。これを日迎え、日送りと呼んで兵庫県や鳥取県の山村で行われていたという。また社日の行事として、太陽の供をしながら東、南、西の神社をめぐることもあった。こうした例を通じてみれば、「彼岸のときに、日の出とともに、遠くからとうとうと神様が、マレビット（マラウト）として来訪してくる」（和歌森太郎）という信仰が生まれ、それが日まつりの主旨であったことがわかる。

日とともに歩み、日をおくるといふ行事がやがて日だけを送る行事にかわってもおかしくはない。江戸の諸大寺が山門を登らせ夕日を拜ませたのもこうした名ごりである。夕日を拜むという点では、すでに四天王寺に西門信仰があったことが知られている。「今昔物語集」巻第十一は「聖徳大子天王寺を建てたる語」に「……その寺の西門に、太子自ら「釈迦如来転法輪所、当極楽東門中心」と書きたまへり。これによりて、諸人かの西門にして弥陀の念仏を唱ふ。今に絶えずしてまいらぬ人なし」と載せている。難波の海に面した西門は極楽の東門に相對しているという聖徳太子の扇額は、浄土を憧れ、もめる人々にとってはこのうえない希望であっただろう。

春分の日、難波の海に沈む夕日を拜して極楽を実感としてうけとめた人々のなかには、入水する信者達もいた。「捨遣往生伝」、「後捨遣往生伝」、または「一遍聖絵」には入水して浄土行を修する人々を載せている。此岸から彼岸へという抽象的なレヴエルのものを具体的レヴエルに移しかえた西門信仰は、迎講や菩提講と同じく浄土願生者達の注目をあつめたのである。西門信仰の根拠となったのは太子信仰であったが、教理的には善導大師の「観経疏」の日想観であったといえよう。簡単にいえば太陽の没するところを極楽浄土と想定し、往生を願う方法である。

夕日を拜する風習と浄土教の日想観との距離はそう遠くないように想える。日まつりの風習がいつごろからどのように行われたかは定かではないし、古代からの太陽信仰についても詳しいことはわかっていないから確定的なことはいえないにしても、人々の心情からみればきわめて素直に夕日と極楽の相は重ねられたことだろう。日想観というきわめて困難な思维的な修行方法が、選ばれた人だけでなく、多くの人々にうけいれられたのも日まつりという民俗的信仰があったからといえないだろう。

か。

こうした民俗的基盤を背景として、彼岸が民間に定着したものだとしても、最も重要な役割をになったのは「念仏」である。彼岸に念仏(講)が行われる例は枚挙にいとまがない。念仏の形態からいえば百万遍念仏、双盤念仏、責念仏がある。このうち最も広い分布をみせているのが百万遍念仏である。民俗的念仏の姿を色濃く残しているものには天道念仏がある。坂本要氏によれば、主として福島、茨城、千葉、神奈川の関東南部に分布をみせ、行事のあらましは、四本の竹でヤグラを組み中央に梵天をたて、重ね餅を供える。ヤグラには五色の梵天、および注連縄を張り、「テントウダ、念仏ダ」の掛け声とともにヤグラの周りを回るといふものである。しかし現在では名称は天道念仏とよんでも、そのほとんどは普通の念仏である。

ここには民俗信仰としての太陽信仰と念仏との混着した姿がみられる。

さて、彼岸が平安時代初期にはじめられて現在に至る

まで多くの信仰をあつめてきたのは仏教の教化力によることであつた。とくに中国やインドにも彼岸の片影がみとめられるにしても彼岸会としての独自の教理、儀礼がくみたてられてきたのは日本においてであつたことはすでに多くの人のふれるところである。

彼岸が慰霊の法会として生れ、徐々に成長をとげるときにあつて、浄土教と結ばれたことが行事発展の大きな契機になつたことは否めない。そして、室町期を中心とした葬祭の民間への浸透と並行して、彼岸も民間に行じられるようになったのだらう。当然、そこには固有信仰との接触が不可欠となるわけである。彼岸をうけとめた人々はそれまでの信仰習俗におきかえて摂取したこともあれば、全く新しい信仰としてうけとることもあつたであらう。

念仏を通していえば、学術的なレヴェルとは別に、民間に行われている彼岸念仏には多くの形態をみる事ができる。この多様さが意味するところは大きい。強いていえば、念仏が民俗の基層に息づいていることをしめしているのである。



念佛ひじり三國志

(百六)

——法然をめぐる——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



「どこまでゆく？」

住蓮は前を歩く男装の美少女に声をかけてみる。無用な質問であることは百も承知だった。最勝四天王院をあとにして、一步一步をきざむこの暮色の道が何処へ通じているのか、四天王院を出た瞬間から住蓮は覚悟していた。

念仏者住蓮に言わせれば西方浄土への道であった。一般的には「処刑への通路」だ。

ただその処刑をどんな方法で執行するのか。住蓮は知っておきたかった。

いま住蓮の周囲には二人の人間しかいない。前を歩く美少女の亀菊と、背後から緊縛の縄目を握る下人がいるだけだ。

警戒が手薄だなどとは思ってもみない。だいたい距離をひらいてはいるが、騎馬の武士が数名追尾してくる。お

そらく前後左右にも姿を見せぬ警固者がいるのであるう。

しかし、なぜこんな空間をわざわざこしらえて、尊長僧都たちは住蓮を処刑場へ運ぼうとするのであろうか。その意図が知りたかった。

亀菊は立ちどまると、肩が並ぶのを待って再び歩きだしながら言った。

「鹿ヶ谷へゆきます」

「鹿ヶ谷のどこだ」

「精舎がありました。その脇が林になっていて、谷の方へ降りてゆきましたね」

「ああ……」

忘れもしない。あの晩、六時礼讃の行道から脱け出して、この亀菊と二人きりで語り合った斜面であった。

住蓮は、その男装を見抜き、女人の体臭も嗅いだ。

「あんな場所へ、なぜだ」

「ついてゆくのか、ついてゆかないのか……」

亀菊は謎のような言葉を洩らした。

処刑場を思い出の鹿ヶ谷に選んだことによって、亀菊は最後の決断をつけようとするのであろうか。住蓮の助

命や手を取り合つての逃亡は不可能にしても「ついてゆく……」という情死行だった。処刑者であるはずの彼女自身が被処刑者に転身するのである。

「住蓮さま」

「何だ」

「もっとお念仏の功德を、聞かせて下さい」

「念仏の功德をか？　しかし、もっととは……」

「先ほど熊谷さまへのお話、身に沁みました。お念仏することがそんなに有難いことだとは」

「うむ。有難いことなのだ。例えばな、愛し合う男女が、この世をはかんで海中へ身を投ずるとする」

「手に手を取り合つてですね」

「そうだ。波間へ沈んでゆくときは、手を取り合つていても二人の心は別々になる。最後は独りで死ななければならぬ」

「どんなに愛し合つていてもですか」

妙に実感をこめて美少女は訊いてくる。すで暮色も深く、涙なのか皺の集り具合いなか定かではないが、彼女の眼元は泣き腫らしているように見えた。

「どんなに愛し合つていてもだ。人間の愛情なんて、所

詮は自己愛から発している。その相手を愛する自己を、また愛されている自己を愛しているだけだ。だから愛が自分の思いどおりにならないと惑ったり嘆き悲しんだりする。手を取り合って海中へ飛びこんでも最後に見つめるものは、おのれの姿だけであろう。相手のことなど眼

中になくなる」

「そうでしょうか。果たして、そうなのでしょうか」

「そうとは思えない」

何か、全身をぶっつけてくるような疑問の投げかけかたに、住蓮は思わずたじとなつた。人間慾界の妻さ

待望の本格／＼仏教／＼歴史巨篇・毎日新聞社から刊行!!

《本誌連載中の大長篇歴史小説》

念仏ひじり三國志

—法然をめぐる人々—

寺内大吉著

現代によみがえる法然の時代——直木賞作家が十年の歳月をかけて遂に完成した法然像——

四六判・上製 全五巻（各巻定価一三〇〇円）

※第一巻・第二巻好評発売中

Ⅱ第三巻は三月中旬発売予定Ⅱ

まじさなのであろうか。

あわてて住蓮は言い足した。

「その点、阿弥陀仏への愛に自己愛はない。いや、自己を捨て切るからこそ絶対の他力であらう。自己を無力化して、すべてを阿弥陀仏の大慈大悲にゆだねる。これが念仏だ。念仏の功德だ」

「……」

住蓮は自分の言葉では未だ説得不足なのを痛感した。

架空の論理では駄目なのである。生きた血のかよった

「聖者の像」をなぞらねばならない。

「獄へ投ぜられる前、小松谷の御堂へいった。その御堂は昔、平氏が世を時めいていたころ、小松内府重盛公が贅を尽して建立した灯籠堂であった」

「灯籠堂……」

「堂内に十二光仏をまつり、万灯の光りがそれを照らし出した。光りは十二人の美女がそれぞれ手燭を献げて仏像の輪郭を描きあげた、と言われる。だが現在、十二光仏こそ残っていたが美女はなく、手燭の光りも消え落ちていた」

「荒れはててしまったのですね」

「そうだ。屋根はむかれ、板壁も落ちて、光りと言っては小松谷の松の梢を縫ってくる月影だけであった」

「月影ですか。荒れはてたお堂へ差しこむ月の光り……でもそれはきつと清らかで、美しいものだったのしょうね」

「その荒れはてたお堂の、月影のなかに唯一人、お坐りになって音吐朗々お念仏を唱えている人があった」

「それは、どなたですか」

「お上人さまだ。法然お上人さまだった」

あの宵を思い浮かべると、住蓮は臉が熱くふさがってくるのをおぼえる。この人のために、どんな苦しみでも耐え抜こう、という犠牲や献身の情念は薄れ、この人と共に生きていられる、という悦びが胸廊の隅々にまでひろがるのであった。

「法然さまは、いまお幾歳でしょうか」

亀菊が俄かに醒めた調子で訊いてくる。

「七十五、いや六歳だったかな」

「そんなお年ですか……憎いお方!」

「憎い、とは?」

「みんなからそれほど慕われ、あがめられるなんて」

美少女が洩らした「みんな」とは、唯一人の人物を指名していたのではないだろうか。

すでに都大都を離脱し、道は爪先上がりの登りになりはじめた。東山が迫ってきた。もう鹿ヶ谷は近い。

背後で駒のひずめがひびいた。一騎、駆け寄ってくる。

「お局」

その声は明らかに尊長僧都だ。

「はい」

「その縛しめは、解いてもよろしいのでは……」

「えっ、縛しめ？ おお、未だこんなものを」

はじめて気づいたように亀菊は住蓮に駆け寄ると、縛りあげられた後ろ手にふれた。縄目を握っている下人に、ほくことを命じた。

「お局、もはやこのひじりに用はなくなりました。あとはお任せ致します」

尊長僧都は馬上からそう吐き棄てると、縄目を握っていた下人ともない、いま来た道を引き返していった。

なぜこの期（こ）に及んで俄かに住蓮を釈放しようとするのであろうか。

二一

鹿ヶ谷の精舎の前まできた。

精舎とは言っても以前は朽ちかけた釈迦堂だった。それを念仏ひじりやその六時礼讃に参加する善男善女が「助力」して精舎らしい結構に仕立てたのである。

いつの時代でもこの国では情報千里を走る。念仏禁断の嵐は鹿ヶ谷の山奥にまで浸透していったとみえる。

精舎に人影はなく、そればかりか情報を先取りした心ない者の手で早くも堂の外壁に破壊のあとが見られた。

「尊長僧都は、わしの身柄をお局に任せる、と言った。どうするおつもりかな」

二人きりに解放され、かえって会話は断絶してしまった。黙々と此処までやってきた。精舎を見て、住蓮はようやく重い口をひらいた。

「さあ……どうしていいのか、わたしにもわかりません」

「僧都の腹はこうなのであろう。お局の口からわしに自絶をすすめさせる。それが最も適切な処置ということに

なる」

「なぜ適切なのですか」

「所詮、わしは尊長僧都や佐々木判官の意にそぐわなかった。熊谷蓮生房の裏切りをすすめるどころか、逆に念仏者として闘い抜くことを説いた。つまり生かしてはおけぬ身なのだ」

「……」

「だが彼らとてもみずから手を下すのは余り気色のいいことではない。わしが自絶してくれば願ってもない結果だ。それにはお局の艶色が甚だ有効となる」

「わたしの艶色ですって」

「さよう、僧都はわしがお局に思いを寄せていることを知っている。また二人だけでかわした会話も盗み聞いたであろう。お局がここで死んで欲しい、と願えばわしが必要それに応ずるであろうと計算もしている」

語りながら住蓮は、なぜ自分がこんなことをくどくどと語りはじめたのか。そのねらいみたいなものに思いあたった。

そのねらいとは……亀菊ノ局を救ってやらねばならぬ、ということだった。世情の外面からも、人間の本质

としての内面からも。

「わたしはそのようなことを申し上げる気持はさらさらございませぬ」

美少女はきっぱりと言った。

「そうかな」

二人は、精舎の前を往きすぎた。

地面はなだらかに下りはじめる。谷川へ向って樹林がひろがっているのだ。足もとの草は、あくまでもやわらかい。

「わたしが申し上げたいのは、このひと言だけです。住蓮さま、お逃げなさい、と」

「逃げるか」

「はい、いまなら……」

「ずいぶん非情なことを言うではないか」

「非情ですって」

「逃げたところで、いまだってこの精舎の周囲には恐ろしい眼（まなこ）があちこちで光っている」

「誰かいるのですか」

「僧都はいちおう身を引いたが、かわって彼の輩下たち。山の衆徒どもが遠巻きにわしを監視している。その

まったただなかへ逃げこんで、みじめな八つ裂きにされろ、とお局はおっしゃる」

「ああ、住蓮さま、わたしはそのようなことは全く存じませんでした。では……」

「自絶しろか」

「……」

「わしはどんなことがあっても自絶などしないからな。これは念仏の教に反逆する行為となる」

「自絶が？」

「そうではないか。わしらは念仏に励みつつ阿弥陀仏のお迎えを待っているのだぞ。お迎えを得たときこそ死なのだ。いや、そういう死が訪れるまでは、どんなに苦しくとも屈辱をおぼえようとも、生き抜かねばならない。かりそめにもみずからの手で命を絶つなどとはあり得ないことだ。来迎し給う弥陀の御手を拒否することになるからだ」

「生き抜くためのお念仏ですか」

「そのとおりで。念仏は生きるためにある。正しい死を見つめることは、同時に正しい生き方を発掘することになる……だがなあ、お局」

住蓮の声が俄かに弱まった。

「何でしょうか」

「いくら正しく生き、正しく死のう、と願ってもナマ身の人間、なかなかそうはいかない」

「でも住蓮さまは動かないご信心をお持ちです」

「いやいや煩惱の炎は消し去り難たい。この点は法然さまもおっしゃっている」

「何とおっしゃいましたか」

「小松谷御堂で念仏三昧にふけていらっしゃりながら、ふと申されたな。蓮の台（うてな）の上に登ってみるまでは測りがたい、と」

「何が測りたいのでしょうか」

「正しい往生であつたかどうかだ」

「法然さまほどのお方でも未だ疑ぐっていらっしゃるのですか」

「そうだ、疑ぐっていらっしゃる。ご自分をな。ご自分を信用ならない男だと疑ぐっていらっしゃる。だからこそ阿弥陀仏のお慈悲を信じ、希求しているのではないか」

「阿弥陀さまの愛を……」

だが、亀菊ノ局はこの時点でもうまで住蓮の真意を洞察していたであらうか。

鹿ヶ谷に夜がきていた。風はなかったが、月も姿を見せない。

それでも住蓮は、あの太い檜の幹を探ぐりあてることが出来た。ゆっくりと亀菊の腰へ腕をまわすと、幹の肌へその弾力のある女体を押しつけた。

「いつであつたか、此処でこうしてお局を抱きしめたことがあつたな」

「わたしは童子ではなく、女であることを見ぬかれた折でございました」

「そうだ。お局は美しかった」

「美しい晩で、あちらから梵唄の声が流れてきました」
六時礼讃の座を二人だけ脱け出してきたのだった。

「そのとき、わたしは何と言ったかな」

「奪うぞ、すべてを奪いつくしてしまふぞ、とおっしゃいました」

「するとお局は、ここへ何やら硬い物を……」

と下腹のあたりへ住蓮はとらえた美少女の手を引き入れた。何度もえぐるようにした。

「ああ……」

「お局、いまだって所持しているであらう」

「知りませぬ」

亀菊は白い頬をさらして横を向いてしまう。

「それしかない。それを用いるしかないのだ」

「住蓮さまは、わたしにあなたを……」

「そうなのだ。煩惱の炎に灼かれたまま西方へ旅立つとは、このことなのだ」

「……」

「お上人さまも、おそらく小松谷でそのことをおっしゃったのだ。間違つた者の手で殺される。それはたしかに正しい往生ではないであらう。しかし乱想の末世ではそれも肯定しないわけにはいかぬ。煩惱五濁の死だ」

「わたしは間違つた者になりたくはございません」

「しかしお局、そなたがわたしを真実、愛してくれているとしたら、残された者はそれしかない。わたしを殺して、いや処刑して身の証かしを立てるだけだ」

「そんなことをやってまで生き永らえて何の人生……」

「いやいや、お局は生きねばならない。真にわたしを愛してくれているのなら、生き続けて、してもらいたいこと

がある。わしのこの信心を受け継いで一人でも多くの人間にひろめて欲しいのだ」

「わたしには出来ませぬ」

密着した男女の腰の周辺でお互いの手が、しばらくもつれ合った。

住蓮は遂に美少女の腰帯の間から懐剣を抜き出していた。二人の手がどちらが上下とも判別がつかぬままその束（つか）を握り合っていた。

「わたしを殺して逃げて下さい」

亀菊は必死に叫ぶ。

「殺したりするものか。わしはお局を、犯すぞ。犯すぞ」

二人は手をかさね合わせたまま懐剣を深々とやわらかい肉の内側へさしこんでいた。

その肉は、どちらのものであったか、しばらくは判別できなかった。

やがて、亀菊の泣き声のなかで住蓮はやわらかな斜面の草へ崩れ落ちていった。

二言、三言、念仏の音が洩れたが、じきにかき消えた。

三

「お局、お見事でした」

黒い影が三つ四つと精舎の方から駆け降りてきた。先頭に立って声をかけたのは尊長僧都であった。

住蓮が洞察したように彼らは終始、兩人の挙動を監視していたにちがいない。

「お局の、このひじりへのお氣持がはっきりとわかりました」

何がわかったというのか。

亀菊はふらつく足で住蓮のかたわらを立ち去りながら、そう絶叫したかった。

「密通したなぞというのもみんなこの男の造り話だったのですな。お局は立派に院へ操をお立てになった。わたしからも良く報告しておきましょう」

たしかに肉体の密通はなかった。だが精神は完全に住蓮にゆだねてしまっていた事実を、亀菊は今更のように確認するのだった。でもそれが嬉しかった。

住蓮の処刑は終った。

それにしても測りたいのは男女の道である。

後鳥羽院はこれ以後、美少女亀菊を溺愛するのである。院の詩人氣質が彼女の奔放で硬質な肌がたまらない魅力だったのかもしれない。白拍子育ち、住蓮との密通を疑ぐりつつも数多い上級公卿の娘たちをかえりみず、亀菊のもとへばかり通よいつめたようである。

やがて、この亀菊に与えた摂津の庄園——それは後白河法皇領で、宣陽門院に属していた長江、倉橋の地頭解任問題が直接の発火点となって、承久ノ変となる（二二二）。結果は官軍の惨敗で、花洛は鎌倉武士団の馬蹄に踏みにじられた。後鳥羽院は隠岐島へ流される。

遠島に随行した女人は唯一人、この亀菊であった。

在島十九年間、後鳥羽院の心は強く専修念仏へ傾斜してゆく。

嘉禄二年正月には法然門であった西林院の僧正承円に、念仏往生の機微を書面で問いかけている。つまり散心、心が取り乱したままでも称名念仏すれば往生が遂げられるかどうか。承円はこれを法然義の継承者と思われる法印聖覚に確認したうえ、然るべき返書を隠岐へ送ったにちがいない。

これがあつたがゆえの「無常講式」であろう。

「無常講式」は後鳥羽院が崩ずる直前に書かれたと思われる「魂の告白」書である。宗教の唱導文というよりも雄渾な詩篇に近い。告白調の筆は冒頭の一句で読む者の胸をつらぬく。

次第無く 法則無く 只無常を念じ弥陀の名を唱

へよ

日時無く 道場無く 閑居の暁の天旅宿の草の枕

この順序を入れかえて「日時無く……」から起そうとする近代の学者もいるが、それは詩篇の韻律を破壊した冒瀆である。平板な説明文に縮小してしまうからである。わざわざこの八句を巻頭で二行にした筆者の意図も薄れる。

老いと興に又病む。来世近きに在り。豈暗然として眠らんや。寒氷紅蓮の暁の嵐には袂を重ねるの妻妾も有るべからず。黒闇泥梨の夜の煙には枕を扇ぐの子も来たるべからず。只弥陀の号を唱えて、

蓮の上を欣ぶべし

こんな調子の文章が綿々とつらなつて、南無阿弥陀仏と唱える以外に救われる道はないのだ、と強調する。

仁和寺本の奥書によればこの「無常講式」が書かれたのは延応元年（一二三九）正月九日であり、後鳥羽院崩御の四十四日前である。六十歳であった。

建永元年から翌年へかけて、あれほど専修念仏者を断庄した人が、三十余年を経たとは言え、なぜこうした「専修唱導の文」を書き遣したのであるうか。

もちろん、その三十余年は後鳥羽院にとって敗戦から遠島という凄まじい体験があったにせよ、宗教思想が持つ底深い海層を覗きこむ思いである。

ただ、こうした後鳥羽院の心の旅路にあつて、つねにその身边に侍り、愛慾を止揚した高い視座からこのロマン詩人を暖かく見守ってきた亀菊の存在を見落してはならない。

広隆寺所蔵の「東寺御舍利相伝次第」に後鳥羽院は正月十八日からご病悩、と明記している。筆者は帰本。すなわち亀菊の法名である。

だから「無常講式」は後鳥羽院が病む以前に書かれており、承円僧正や聖覚法印に念仏の本義を問いかけた書簡は嘉祿二年（一二三〇）で隠岐へ渡ってほどなく専修念仏へ帰入し、信心は年と共に深まったことが想像された。

その教化者に、かつての美少女、住蓮との純愛に生きた亀菊を考えることは出来ないであらうか。

また隠岐島で火葬にした後鳥羽院の遺骨は、四十九日をすぎたあと十九年間側近に付き添った元北面ノ武士能茂、ひじり名西蓮がこれを都へ持ち帰ったとある。

「承久記」によれば遠島の随伴者は出羽前ノ司重房、内蔵権頭清範、女房一人、伊賀局、聖一人、医師一人、となつてゐる。伊賀局は亀菊のことであり（これが同一人とは思えない）、聖（ひじり）一人が北面ノ武士能茂であらうか。それにしても西蓮という「ひじり名」は住蓮を思ひ出させる。

住蓮の遺骸は佐々木判官の手の人によって再び馬淵の里へ運ばれた。そこで埋葬されいる。

これを知った住蓮の老母は池に身を投じて自殺した、と「法然秘伝」にはある。

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時、「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞ振ってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しく協力下さいませ。

- 一、内容 自由 (生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。)
- 一、枚数 四百字用紙五枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十九巻 三月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和五十八年二月二十五日 印刷
昭和五十八年三月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
振替東京八一八二一八七番
千一〇三

